

(5) 「死にて葬られ、陰府に下り」

村上 伸

ローマの信徒への手紙 6章 1節-11節

今日のところは、「十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり」というこの部分です。使徒信条の中で質・量ともに最も大きくて重いのはイエス・キリストについて告白した第二項で、子なる神、つまりイエス・キリストについて告白した箇所です。重い、軽いという言い方はあまりよくないと思いますけれども、やはりこのところが中心だろうと思われます。

これは福音書についても同じように言えることでありまして、イエスの受難と復活の物語が福音書の中で一番詳しく、そして分量も多いのです。福音書というものはイエスの受難と復活の物語を中心にして構成されたと考えてよろしいと思います。それと同様に、この第二項が、使徒信条のまあ心臓部と言えましようか。カール・バルトは、このところは「中心の中心だ」という言い方で説明しております。私たちは今や最も重要な箇所にさしかかっていると、ひとまず申し上げておきます。

さて、「十字架につけられ死にて葬られ」と告白されています。この「十字架につけられ」という言葉は、イエスがどのような仕方で処刑されたかという死のかたちを示す言葉です。内容は苦しめられて死んだ、そして葬られたということです。そのかたちが十字架であったということでしょう。ですから、これについてあまり多くのことを語る必要はないと思います。

ただ、十字架というのは、ユダヤ民族伝統の処刑法ではありませんでした。これは異民族のやり方、つまりローマの処刑法です。ユダヤ民族の場合は、「石打ち」が死刑の伝統的なやり方でした。皆の前で座らせておいて、まわりから大きな石をぶっつけて死ぬまでそれを続けるという、かなり残酷な方法です。しかしそれによらないで、ほかの民族のやり方を採用してイエスを殺したということになります。でもそれは、かたちの上のことで、肝心なのは、彼が苦しみを受けて死んだということ、そして葬られたということです。ですから、私は今日の説教では「死にて葬られ、陰府にくだり」という点について述べたいと思います。

言うまでもないことですが、すべての人はやがて、時が来ると死んで葬られます。日本では、土葬という習慣はよほど田舎に行かないと見られなくなりましたから、「葬られる」と言っても火葬にされて骨壺に入って、墓石の下に納められる。あるいは納骨堂に納められる。すべての人はやがて時が来ると、そういう風に死んで、もちろん私もですが、墓の中に納められます。誰一人このことを免れる人はいません。この点に関しては全く平等でありまして、すべての人間がわけへだてなく味わわなければならない。そしてイエスも同じでした。イエスも死んで葬られた。このことの意味は、ちょっと考えると当たり前のことを言っているように見えますけれども、あの使徒信条が成立する過程で起ったいろいろなことを考えますと、これは必ずしも自明のことではなかつ

たと思います。と申しますのは、紀元二世紀のはじめ頃だと思いますけれども、キリスト仮現説という思想があらわれたことがあります。これはかなり力を持った考え方としてキリスト教の歴史の中にその名をとどめています。「仮現説」というのは、最近よく言われる「バーチャルリアリティ」(仮想現実)というのに似ています。英語でドケティズム docetism と言いますが、これは一見そう見えると言うギリシャ語「ドケイン」から来たものです。これが第二世紀に現れて、キリスト教会の中で一定の力を発揮しました。それに影響される人も相当出たようです。

で、どういうことかと言いますと、この仮現説を信じる人たちは、キリストが神の子であるということを真剣に考えた。要するに真面目なんです。キリストは神の子である。その神性を強調しようとする、その方が同時に人間であるということと論理的には矛盾します。神であって人である、ということは普通、論理的には成り立たないことです。ですから、イエス・キリストが人であったということ、つまりキリストの人性を否定したのです。そしてキリストが人となってこの地上で生きたということ、あるいはその帰結として苦しんで、他のすべての人間と同じように死んで葬られたということは本当はなかったということを唱えました。仮現説というのはそういう思想です。すべては仮にそう見えたにすぎない。仮の姿、つまり仮象であったということを行いました。これは、古くはペルシャの二元論などから影響を受けて出て来た考えだと考えられます。また、ギリシャの哲学の影響もあったでしょう。要するに神は善であり、人間は悪であってこれに対立する、と言います。善と悪、光と影、永遠と時間という風に神と人間というものを二つに分けて考えます。そうすると絶対的な善である神が悪である人間の肉体をとって、この地上に生きるという風なことは有り得ないということになる。また永遠なる神が時間の支配を受けること、つまり死ぬということも有り得ない、したがって神の子であるキリストが、苦しむはずはないし、まして死んで葬られるなどということがあはずはない、それではまるで卑しい人間と同じではないかと、そういう主張なんです。

しかし聖書は、キリストはまさにそのような卑しい人間と同じになられたと宣べ伝えていています。これは仮現説の立場に立つ人にとっては大きな躓きであったわけでしょう。しかし、彼はまさに卑しい人間と同じ形を取られた。使徒信条が告白していることはそういうことです。全く人間と同じ形をとってこの地上で生き、苦しみ、そして死んで葬られた。「受肉」というのはそういうことなのです。仮現説が主張する観念としての神の子・キリストは、苦しむことも死ぬことも葬られることもありません。そういうことはあってはならないのです。理念とか思想とかいったものは、死んで葬られることは有り得ません。

しかしイエスは、この地上に生きて、私たちみんなと同じように死んで、墓に葬られた。つまり、そういう現実の人間として、私たち一人一人と全く同じように、過ぎ去るべき肉体をそなえた現実の人間として、それゆえに悩みや苦しみを経験しながら生き、そして死んでいかれた。そういう現実の存在としてこの世で生きられたのだということなのです。「死にて葬られ」と聖書が宣べ伝えていているのは、そういうことです。単なる観念としての神の子キリストというのでなく、まさに現実の人間になられたということ

です。

ですからこれは、フィリピの信徒への手紙の2章の、あの有名な賛歌と同じです。「キリストは神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(6節以下)ここで「自分を無にする」とか「僕の身分」と言われています。僕というのは奴隷のことです。この場合は、多くの人々に仕えたということの意味ですが、同時にギリシャでは精神の牢獄と考えられていた肉体をとって生まれた、ということも言いたかったのではないか。そういう意味が全くなかったとは言えないと私は思います。しかし、とにかく自分を無にして、僕の身分になる。私たちと同じ人間になれる。へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、従順であった、というのです。

これは、使徒信条が「十字架につけられ死にて葬られ」と言っているのと同じ内容をもう少し詳しく述べたものです。それは要するに仮現説ではないということです。キリストを何か美しい理念みたいなものとして理解することは間違いです。聖書から考えると、私たちはそう考えてはならない。キリストは美しい理念ではない。キリストはまさに私たちと同じような肉体をとってこの地上に生きられた方です。そして私・たちと同じようにいろいろな悩みをかかえ苦しみを経験して死んでいかれた方です。それがイエスです。

非常に不思議なことですが、それが神の子が人となったという奇蹟の意味です。要するにそういうことを使徒信条もフィリピの信徒への手紙も言っているわけですが、その内容をさらにもう少し掘り下げてみたいと思います。

新約聖書全体から何箇所か拾い上げてみたいと思いますが、そういう風に全体から見ると、十字架上で死なれたイエスの死というのはただごとではない出来事であったと思われれます。たとえばガラテヤの信徒の手紙3章13節、「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。『木にかけられた者は皆呪われている』と書いてあるからです」。キリストの死というのは実は神の呪いだったという理解がここに出て参ります。「死にて葬られ」の「死にて」という言葉の中には、実は神の呪いという意味があると言っているのです。

それからローマの信徒への手紙6章23節には、「罪が支払う報酬は死です」という言葉があります。こういう考え方が旧約聖書以来ずっとありまして、死というのは「罪が支払う報酬」であり、したがって「神の裁き」であると考えられていました。聖書の中に流れているこのような考え方がここでは取り上げられています。

もちろんそればかりではありません。死というものには、いろいろな面があって、聖書は必ずしも一つの見方に統一されてはいませんが、しかし死が神の罰だという考え方が聖書の中にはずっと流れています。一つの面に過ぎませんけれども、それはかなり有力な考え方としてある。それをパウロは取り上げて、キリストが十字架につけられたというのは実は神の裁きを受けて、神の罰をご自分で引き受けられた、ということである

と解釈しているのです。

それから試練という考え方があります。マルコによる福音書 15 章 34 節には、キリストの最後の言葉が記されています。「3 時にイエスは大声で叫ばれた。『エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。』これは、『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。」「神様、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」イエスは神に対して「アッバ父」(お父さん)と呼んでいたように非常に近い関係を持っていました。その彼が、最後の段階になって「なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫んだ。「アッバ」と呼ばれる父に対する信頼が揺らぐような事態に彼は直面させられたんですね。「なぜわたしをお見捨てになったのですか」人間の世界でも、子供が親から捨てられることがあります。そのような時、子供は「なぜ僕を捨てるの」と問うでしょう。これは人間にとっては最も辛い試練で、そういう経験を、イエスもなされたのです。「なぜわたしをお捨てになったのか。」

ですから、イエスが「死んだ」と短い言葉で書いてありますけれども、その内容は軽くはありません。本当だったら、罪人である他の人間にふりかかるべき呪いと罰と試練がイエスの身の上にふりかかって来たということです。死んで葬られたというのはそういう意味です。これはただごとではない重さを持っています。

しかし、本当だったらば他の人間に、つまり私たちにふりかかるべき呪いと罰と試練をイエスがお受けになったというそのことによって、事態が逆転いたします。それはローマの信徒への手紙 6 章の 2 節以下に書いてあることです。たとえば 6 節以下に「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。死んだ者は罪から解放されています。わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることもなると信じます」と書いてあります。

キリストが死んだということは、もちろんこれは後に復活したということと結び付けて解釈されているわけですが、私たちも彼と共に死ぬということの意味している。つまり、彼は私たちの代理として、私たちのために死んだのです。そのことが実は、新しい命への逆転をもたらしたのだという考え方です。神の子は、本当だったら私たちが受けなければならない呪いと罰と試練を受けられた。そのことによって、私たちが実は、それを知る以前とは全く別のものになっているということです。

こここのところをもう少し説明しますと、これは人間の関係でも似たようなことがあります。たとえば、親しい友達でも家族でも誰でもいいのですが、「あの人がいる」ということを考えるだけで、何か自分が支えられていると感じるような経験がありませんか。とくに何をしてくれるというわけではないかもしれない。ただ自分のことを心にかけていてくれる。自分のためにときには涙を流して祈っていてくれる、そういう人がいるということを知る前の自分と、そのことを知った後の自分とは、質的に違っています。たったそれだけのことで、私たちの存在は質的に違ったものになります。ああ、あの人がいる。そういうことは私たちが人生で経験する非常に大きな慰めの一つですね。

前に聞いた話ですが、ロンドンであるお年寄が自殺した。枕元に一冊の手帳が残され

ておりまして、その手帳の最後のページに「この一週間、誰一人に言葉をかけてくれなかった」と書いてあったそうです。私たちはそういうことによって力をなくしてしまうのです。これは逆の例です。

神御自身が私のために呪いと罰と試練を引き受けられたというこの思想、これは私たちにとって本当に大きな力です。それは私たちを変えてしまいます。ローマの信徒への手紙の8章31節に、「では、これらのことについて何と言ったら良いだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」神がわたしたちの味方だということです。大いなる方、世界を支配している神が私たちの味方だ、イエスが私たちの代りに呪いと、罰と試練をお受けになったということは、そのことの証しだと言うのです。そういう風に自分というものを見ることができるようになる。イザヤ書53章に書かれてあるのもそういうことなのです。4節に

「彼が担ったのはわたしたちの病
彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに
わたしたちは思っていた
神の手にかかり、打たれたから
彼は苦しんでいるのだ、と。
彼が刺し貫かれたのは
わたしたちの背きのためであり
彼が打ち砕かれたのは
わたしたちの咎のためであった。
彼の受けた懲らしめによってわたしたちの平和が与えられ
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」

さらに9節には、

「彼は不法をはたらかず
その口に偽りもなかったのに
その墓は神に逆らう者と共にされ
富める者と共に葬られた。
病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ
彼は自らを償いの献げ物とした。
彼は子孫が末永く続くのを見る。
主ののぞまれることは彼の手によって成し遂げられる」

彼というのは「主の僕」と呼ばれるこの不思議な人物のことです。この人物の姿は、どこかでイエスと重なって来ます。

神が私たちの味方になるというのはそういうことであって、そのことによって私たちには解放が起ります。過去からの解放、罪からの解放、絶望からの解放です。そして勝利への道が始まります。洗礼というのはそういうことです。もう一度ローマの信徒への手紙6章に戻りたいと思います。ここでパウロは洗礼のことについて述べている。しかもそれを、イエスの死と結び付けて解釈しています。「キリスト・イエスに結ばれる

ために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。」さらに8節には、「わたしたちはキリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにまなると信じます」とある。キリストが死んだということと、私たちとが、そこで結ばれている。その不思議な形が洗礼なのです。私たちのために死んでよみがえったということは、私たちが彼と共に死んで、彼と共によみがえる、という道をイエスが開いてくださったということです。

最後に、「陰府に下り」という言葉について一言だけ申し上げておきたいと思えます。これは、今日ご一緒に交読した詩編 139 編によって理解するのが一番いいのではないかと私は思います。そこにはこう書いてあります。

「どこに行けばあなたの霊から離れることができよう。
どこに逃れば御顔を避けることができよう。
天に登ろうとも、あなたはそこにいまし
陰府に身をよこたえようとも 見よ、あなたはそこにいます。
曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも
あなたはそこにもいまし
御手をもってわたしを導き
右の御手をもってわたしをとらえてくださる」

ふつう陰府というのは死者の国です。私たちの翻訳では陰府となっていますが、ヨーロッパの言葉では、はっきり訳されておりまして、ドイツ語では「死者の国」、「死の国」です。その死の国に彼は下ったというのです。徹底的に見捨てられたと思われるようなところ、そこにも彼はいる。そういうことです。詩人は「海のかなたにいきつこうとも」と言いました。海というのは聖書では混沌を意味します。その果ですから、混沌の支配のそのまたむこうで、神の恵みもそこまでは及ばないのではないかとみんな考えているようなところですが、しかし、そこにもイエスはおられるというのです。イエスが陰府にくだったというのはそういうことです。

だからわたしたちはどんな時にも「もうだめだ」と言わないようにしましょう。どんなところにもあの方がいっしょにおられるのですから。

(日本基督教団みくに伝道所 1997 年 1 月 12 日 礼拝説教)